

高校野球部顧問の実践的思考様式に関する研究

関根 翼 (三重大学)

1. 目的

本研究の目的は、「実践的思考様式」(佐藤ら、1990)に着目し、試合中の指導場面から高校野球部顧問の指導の特徴や思考の性格の解明である。

2. 研究方法

対象者はN高校硬式野球部顧問2名(以下TaとTsuと表記)で、対象場面は練習試合の1回から5回である。調査方法は普段の指導に加えて、頭の中で思考している内容を発話するように依頼した。試合中の教師の発話内容と視線方向を、頭部に装着した小型軽量デジタルカメラ(Gopro Hero9)によって記録した。記録された発話から、命題(意味を持つ発話の1文の単位)ごとに分けし、各命題を「事実」「印象」「推論」の3つの内容に分類した。また2名の発話中の視線方向を1秒ごとに記録し、全体の発話時間における各視線方向の割合を算出した。さらに、2名の発話場面から特徴的な場面を事例として抽出し、質的分析を行った。

3. 結果と考察

1) 命題内容

推論がTaは57%、Tsuは78%とともに高かった。このことは、試合中に誰が見ても明らかな事実や単純なプレイに対する印象ではなく、理由や根拠を伴った評価や、次に起こるプレイを推察していることを示している。2名の命題内容の割合を佐藤ら(1990)における熟練者と比べると、「推論」の割合が同等であり、2名はともに熟練者と言えることがわかった。

2) 視線方向

2名の視線方向の割合を見ると、Taはキャッチャー(18%)とバッター(20%)、Tsuはベンチ(51%)が高かった。Taはプレイヤーに、Tsuはプレイをしていない選手に多く発話しており、2名がそれぞれで違う役割認識の下で指導をしていることが明らかとなった。

3) 事例

事例として抽出した6件に共通していたことは、2名の指導者が技能や戦術などの競技的な指導と、情動伝染や他者視点の取得といった、教育的な指導をプレイ中に見出していたことである。野球のプレイ中に埋め込まれている競技的内容と教育的内容を表裏一体とした指導を行っていたことが明らかとなり(図1点線枠部分)、このような指導を2名が自覚しているかは定かではないが、潜在的な知識として機能しているものであると考えられる。

4. 結論

本研究では、以下の3点が明らかとなった。1点目は、対象とした教師2名の発話に「推論」が多く、熟練教師の特徴を有し、プレイや出来事、文脈から即興的に立ち振る舞っていたことである。2点目はプレイ中において、競技的、教育的な指導を表裏一体としてとらえ、運動部活動の理念である文化的かつ社会的な人間の育成を行っていたことである。3点目は、教師2名が別々の役割を有し、部員全員に指導が及ぶ指導形態をとっていたことである。

<主な参考文献>

佐藤 学・岩川直樹・秋田喜代美(1991)教師の実践的思考様式に関する研究(1)：熟練教師と初任教師のモニタリングの比較を中心に。東京大学教育学部紀要，30：177-198。

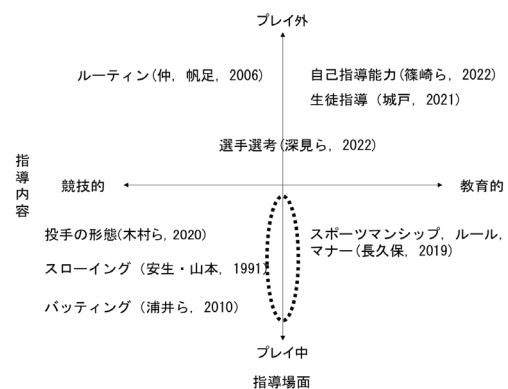


図1 運動部活動における指導場面と内容の分類